



Japan Society of
Youth and Adolescent Psychology

News Letter

第 61 号 2013 年 6 月 30 日
発行：日本青年心理学会事務局

■ 目次

< 第 21 回大会委員長挨拶 >

五十嵐 敦：日本青年心理学会第 21 回大会のご挨拶

< 特集 > 青年と読書

齊藤 耕二：アガサ・クリスティ「春にして君を離れて」—文学作品と心理学—

畑野 快：青年が読書をするものの意味—アイデンティティ形成との関係から—

丹下智香子：個人的体験としての、青年期と読書

—「私は、私が読んだものでできている」—

坂井 敬子：読書—人生の不安、絶望、不徳を分かち合う—

森岡 正芳：青年と読書—高校生になる君へ—

< 書評 >

吉川 悟：村澤和多里・山尾貴則・村澤真保呂（著）『ポストモラトリアム時代の若者たち（社会的排除を超えて）』

二宮 克美：白井利明・都筑学・森陽子（著）『やさしい青年心理学』（新版）

< 広報 >

青年心理学研究編集事務局からのお知らせ

事務局からのお知らせ

< 第 21 回大会委員長挨拶 >

日本青年心理学会第 21 回大会のご挨拶

大会委員長 五十嵐敦（福島大学）

2013 年の青年心理学会第 21 回大会を福島大学が担当します。開催日程は 11 月 16 日（土）・17 日（日）です。昨年度、第 20 回というひとつの節目を迎え、新たな一歩を踏み出す大切な大会を引き受けさせていただきます。学会の運営はもとよりあまり大会にも参加していない一会員として、甘い状況認識でこの時期に設定してしまいました。会員の皆様にはお忙しい時期かと思いますが、どうぞよろしくご参加のほどお願い申し上げます。

ご存じのように福島は、2011 年 3 月 11 日の東日本大震災で大きな被害を受けました。また、福島第一原発の事故は国内だけでなく世界中から注目される「フクシマ」となっていました。震災直後は、バスをチャーターし学生を西と南・北の 3 方向に避難させるなど、一時は大学の存続自体が危ぶまれました。いまではこれまで以上に幅広い支援活動や教育・研究の取り組みを展開し、活気に包まれています。

この地で学会を開催するにあたっては、まだ不安な会員の方もいらっしゃるかと心配されましたが、どうぞ安心してお出かけください。皆様にお集まりいただくことが復興への一過程です。青年の自立には、その受け皿となる産業復興や地域の活性化が必要です。多くの方々

に福島に来ていただき、いまの福島の姿を皆様に見ていただければ幸いです。

学会会場は、福島駅すぐそばの「コラッセふくしま」です。東京駅から新幹線で100分、仙台からは25分と便利です。また駅周辺ということで、会場周辺にホテルなど宿泊施設もありますし、少し足を伸ばせば温泉も堪能できます。

本題の学会の内容ですが、復興の意味も込めて参加される皆様につくっていただくというのはいかがでしょう。まだ検討中ですが、セレモニー的な講演とシンポジウムは準備委員会が最低限企画します。それ以外は、多くの会員の皆様に研究発表や諸企画を立てていただくことをお願いします。では紅葉のみちのくでお待ちいたしております。

＜特集＞青年と読書

1冊の本との出会いが、時に人生を変える大きな意味を持つことがあります。それが青年時代であれば、なおさら鮮烈な経験として心に刻み込まれることでしょう。

若者の活字離れが指摘される昨今、「本を読む」ことは青年にどのような意味をもたらすのでしょうか？

今回は「青年と読書」をテーマに、会員の皆様の様々な思いをご寄稿いただきました。

この特集が、皆様にとって、現代青年と読書への思いを共有するきっかけとなることを願っています。
(担当：則定百合子、小沢一仁)

アガサ・クリスティ「春にして君を離れて」—文学作品と心理学—

齊藤耕二（名誉会員）

ニューズレター編集委員の小沢さんからアガサ・クリスティの「春にして君を離れて」について書くようにと依頼されて、迷っている間に締切りを過ぎ、催促を受けてしまった。今になっては断ることも出来ないので書き始めた次第です。

小沢さんからのメールでは、クリスティのこの小説が「青年心理学の良い教材になる」と話したそうだが、どのような文脈でそのような話をしたのか全く思い出せない。心理学の講義を持っていた時に、導入としてしばしば文学作品—私の趣味であった推理小説や児童文学を利用したのだが、青年心理学の講義ではもっぱら児童文学の作品であったように記憶している。

シェイクスピアのソネットの一節をタイトルとした「春にして君を離れて」はアガサ・クリスティの数多い作品の中で例外的な推理小説でない作品で、宮部みゆきが新聞の小さなコラムでかつて絶賛したことがあった。当時この書店に横積みされていたが、今では見かけることがないので、絶版になっているのかもしれない。砂漠の中の中継所で列車の開通を待つ中年女性の回想を中心とした物語で、この主人公自身が青年心理学の材料とはなりそうもない。もしかするとこの母親から離れるために結婚を急いだ娘を取り上げて青年期の親子関係に結びつけたのかもしれない。クリスティの本も青年心理学の講義ノートも始末してしまっている現在、確かめることが出来ない。

オルポートは、人間の理解には心理学の枠を超えたさまざまな考察を総合することの必要性を強調しているが、文学作品には人間性への鋭い洞察と生き生きとした叙述が含まれているので、心理学の理論をわかりやすい表現で示すのに役立つと思われる。

青年が読書をすることの意味—アイデンティティ形成との関係から—

畑野 快（京都大学大学院）

青年が読書をすることにはどのような意味があるのだろうか。もちろん青年とは青年期を生きる若者を指す。青年期はアイデンティティの形成の時期とされており、その形成には他

者の存在が不可欠である。なぜならアイデンティティの形成とは様々な水準の自己と他者の同一性の問題を解決していくことを表すからである。したがってアイデンティティの形成と他者とは不可分にあり、他者を抜きにしてその形成はあり得ない。「どのような他者と出会うか」ということが青年のアイデンティティの形成に影響を与えるのである。もちろんここでの他者は現実に存在するとは限らない。テレビやインターネット、紙面上で出会う他者であってもかまわないし、空想上の他者であってもいい。このように考えると読書とは他者と出会う機会の一つと言える。

私自身の経験を改めて振り返ってみると、青年期に読書をするのは特にアイデンティティの形成に影響を及ぼすように思う。特に私は青年期前期・中期の時期に、友人や先輩、先生など様々な他者と出会ってはいたものの、自分自身の感情が強く動かされることや生き方について考えることは読書を通して「他者」と出会った時であった（もちろんここの読書には漫画も含まれるのであるが）。この時期は特に自己愛が高まる時期でもあるため、ある意味非現実的な存在がロールモデルともなりやすいのかもしれない。もちろん、読書を通して出会った他者の影響は常に肯定的なものではなく、社会に対して否定的なアイデンティティを形成させることもありうると思う。青年は読書を通して現実的には中々出会うことができない他者と遭遇し、アイデンティティを達成あるいは拡散させる。このように考えると青年にとって読書とは他者との出会いであり、アイデンティティの探求に寄与する貴重な機会であると思う。

個人的体験としての、青年期と読書—「私は、私が読んだものでできている」—

丹下智香子（独）国立長寿医療研究センター NILS-LSA 活用研究室）

昨年、某大手企業のCMで用いられていたキャッチフレーズに倣って表現させていただくと、「私は、私が読んだものでできている」。もちろん、読書以外にも「自分」を形成する要素は数多く存在している。しかし、青年期（特に中学時代）においては未だ実際の生活行動範囲や人生経験の幅が狭い分、その相対的な影響力は大きかったと考える。とはいえ、本稿の執筆依頼にあった「青年期に読んで刺激を受けた本」、あるいは自分が読んで「青年に紹介したい本」をこの紙面上で示すということは、(過去から現在への連続性を前提とすると)すなわち現在の自分の一部を公に開示するようなものである。それはご容赦願う次第であり、青年に対しては「どのような本であれ、青年期の読書は『自分』の一部を成す(はず)」ということのみ指摘しておきたい。

他方、個人的な経験として現在の時点から自分の中学時代を振り返ると、「読書」には、副産物があったということが出来る。おそらく読書好きの人ならば誰も覚えがることと思うが、中学生の頃は時間的な余裕に比して、本につき込むことができる資金が明らかに不足していた。にもかかわらず、学校の図書館では限定されたジャンルの本しか借りることができなかった(ちなみに、公立図書館は公共交通機関を使う必要があるほど遠かったし、現在とは違い当時は古書店が子どもには足を踏み入れにくい場所であった)。そのため、同様の状況にある「読書好き」が学校などで盛んに「本の貸し借り」を行ったのであるが、「おもしろいと『思える』本」が似ている人、つまりは考え方や価値観、好みが似ている人と頻繁に本の貸し借りを行った…その結果として、私は30年来の親友という、偉大なる「副産物」を得たことになる。そして、それもまた私の為人(ひととなり)の一部となっているはずである。

読書—人生の不安、絶望、不徳を分かち合う—

坂井敬子（静岡大学）

心理学の授業で青年期の話をする、「自分の青年期は暗黒時代」、「毎日『これでいいのか？』と思う」などと感想に書いてくる学生がいる。かの小林秀雄も、自身の青年期を「不安時代」と表現し、青年の特権はみずから不安を作り出すことだという¹。だからこそ、青年が不安から脱しようともがいても、大人は易々と答を与えてはいけないのだと思う。

多くの文学が、人の陽でなく陰の方を描く。川上未映子の『ヘヴン』²が示すのは、絶望的に続くいじめだ。いじめはあくまでモチーフで、問題はもっと根源にある。私たちは、著者からの間にきちんと答えられないまま、つらい描写に曝される。谷崎潤一郎の『異端者の悲しみ』³が示すのは、一人の青年による数々の不徳である。救いようがなく、滑稽ながらも苛立ちがこみ上げる。

陰を描いた物語は、徹底的であるほど私たちに不協和をもたらす。しかし、それから眼を逸らしたら、人生は味気無いものに成るだろう。答は直ぐに出ない筈で、それでもよいのだ。読書というものは、難問を著者や他の読者と分かち合うことなのだろう。小児科医であり脳性まひの障害を持つ熊谷晋一郎は、「絶望を分かち合うことができた先に、希望があるんです」という。それは、彼が一人で外出している時にアクシデントが起きて、通りすがりの人に救ってもらった経験が基になっている。「『世界はアウェー（敵地）じゃなかった！』という絶大な希望を感じた」という⁴。

若い人たちには、答の出ない難問に出遭うためにも、それを人と分かち合うためにも、沢山の本を読んで欲しい。

<注>

¹ 小林秀雄「青年と老人」『考えるヒント』文芸春秋、1964年、pp.180-194.

² 川上未映子『ヘヴン』講談社、2009年.

³ 谷崎潤一郎「異端者の悲しみ」『刺青・秘密』新潮社、1969年、pp.107-184.

⁴ 東京都人権啓発センター「インタビュー／熊谷晋一郎「自立は、依存先を増やすこと 希望は、絶望を分かち合うこと」」『TOKYO 人権』Vol.56、2012年、pp.2-4.

青年と読書—高校生になる君へ—

森岡正芳（神戸大学）

お便りありがとうございます。高校時代にどのような本を読んでいたかというご質問ですね。高度なソーシャルネットワーク時代に読書体験のことをご質問いただくと、時代離れした問いかけにも聞こえますが、うれしかったです。青年期は社会状況によって大きく変動するようにみえますが、一方で時代状況に関係なくいつも変わらないテーマがあります。読書はどうもそこに関係するようですね。

一方で、もう人生を駆け足で帰還しなければならない年代になった私からすると、高校生になるあなたにお伝えすることは、ぴんとはずれの答えになるのをご勘弁ください。

まぎれもなくいえるのは、高校のころに打ち込んだこと、好きだったことは一生を通じて、引きずります。自分が落ち着く場所、あるいは元気の素でもあります。私の場合確かに読書はその一つでした。人生はそれなりに節目があり、人生を長いと見るのか短いのかそんな簡単には結論は出せません。しかし本を読むことで、一瞬の間に様々な人生を体験できるし、今でも率直に感動を感じる本が多くあります。高校の図書館で借り出しておずおずと読み始めたプールの大長編、その当時は翻訳も新潮社から出ていた古い活字のものが、長編の序章に当たる「コンブレ」「スワンの恋」あたりが、筑摩や河出の世界文学全集に入っていて、それらを読むしかなかったのです。いつぞや、フランス語で全部読んでみたいと夢見た高校

生でした。この夢はまだ実現していません。

トーマスマンの『魔の山』。読んでいる時間がそのままある時代の異国での人生を生きているような錯覚を覚えるような作品です。かなりの長編ですが、これは1回読むともう一度初めから読みたくなるような代物で、時間体験に関わる魔術が潜んでいます。

高校時代に打ち込んだことはずっと残り、どこかで自分の人生を維持する通奏低音のような働きをなします。自分の変わらないところに戻るのには懐かしさと喜び、かすかな哀愁も感じますね。今の間にいっぱい本を読んでください。

<書評>

村澤和多里・山尾貴則・村澤真保呂（著）

『ポストモラトリアム時代の若者たち（社会的排除を超えて）』

（世界思想社，2012年10月刊，¥2,415）

吉川 悟（龍谷大学）

本書は、三名の立場の異なる著者を通して見える「近年の青年期」を論じており、キーワードに示されている「ひきこもり、オタク、腐女子」など、近年の若者たちの特徴を取り上げている。そして、青年期の心理的発達の特徴である「モラトリアム」ということばに含まれていた「社会化的猶予」という学術的な視点ではなく、「ポストモラトリアム」という新たな用語を用いて、若者たちが社会化することを困難にしている現実を照らしている。

議論の契機として選択している話題は、歴史的変遷を取り上げつつ、文化的背景に含有されていた対人関係のあり方を取り上げている。映画、テレビドラマ、社会の安全対策・対応など、なにげない日常の変遷を取り上げ、それが文化以上に若者に対する強要の伏線となっていることを論じている。また、評者が臨床で取り組んでいる「ひきこもり」についても、二重の悪循環の存在を見事に示している。特に秀逸であったのは、オタク文化における男子ではなく「腐女子」を取り上げたことであろう。臨床的にオタク女子の精神構造は、思春期・青年期臨床に手慣れていないと論じられず、その解説も素晴らしい。

惜しむらくは、せっかくの「ポストモラトリアム」という用語を使い切れていないことであろう。「モラトリアム」が叫ばれた背景も、「産業革命」の影響から前世代と異なる社会があり、そこに生まれた不安が「社会的猶予」を作り出していた。今、「障がい」を逸脱として蔑視することを許容していること、「希望や夢」という人参をぶら下げている陳腐な前世的強要などの困難要素とともに、ひきこもりを「自宅警備」と自嘲的に語るリジリエンシーという新しい視点から、負荷に抗う姿を示す可能性もあったと考える。

それでもなお、素直に本書の感想を述べるならば、「青年期の現実の裏側を知る書」として推薦したい一冊である。

白井利明・都筑学・森陽子（著）

『やさしい青年心理学』（新版）

（有斐閣アルマ，2012年12月刊，¥1,995）

二宮克美（愛知学院大学）

『青年心理学』のテキストが、新版を出した。青年心理学会の会員として、わがことのように素直にうれしい。かつては、教職の必修科目であった「青年心理学」であるが、現在はこの科目名で講義が行われている大学は少なくなっている。そうした状況の中で、「青年心理学」というタイトルの書籍が版を重ねるということは、ありがたいことである。

新版には、次のようなキャッチ・コピーが表紙カバーについている。

「青年を取り巻く社会的状況から、歴史的な脈や現代の心理的諸問題、さらには青年を理解するための方法まで、青年心理学の基礎知識を平易に解説。青年を的確に理解するために。青年が自分自身をみつめなおすために。」

また本の赤い帯には次のように書かれている。「社会や時代を映す鏡としての青年。青年は生きていく社会や歴史的な脈から影響を受ける存在です。いっぽうで青年は、新しい社会や文化を創造するにない手でもあります。さまざまな切り口から、青年の本質に迫る入門書です。」

こうしたブックトークから、この本のねらいが読み取れる。

前版とは10年のひらきがあるものの、章立てなどは全く変更がない。約20ページの増加だが、それはこの間の新しい知見や社会の動きを盛り込んだ成果である。

第1章：青年期へのアプローチ 第2章：自己形成のすじみち 第3章：認知の発達 第4章：家族のなかの青年 第5章：学校のなかの青年 第6章：地域に育まれる青年 第7章：就職と労働 第8章 青年期と非行 第9章：ひきこもる青年とその対応 第10章：青年期と性 第11章：歴史のなかの青年 第12章：青年を理解する方法 という全12章から構成されている。

それぞれの章の扉に、その章の内容が完結に紹介されており、それを読むとその章で何が解説されているか大筋で理解できる。また、5つのコラムが話題の焦点などを解説している。文献・参考図書も充実しており、青年心理学の初学者にはまず手始めに読む書として持ってこいである。さらに少し知識を整理したいという人にもうってつけである。

<広報>

青年心理学研究編集事務局からのお知らせ

「青年心理学研究」編集委員長 高木 秀明

第23巻第1号(2011)から、青年心理学研究の年2号化が始まりました。現在も、たくさん論文が投稿され、査読が進められています。青年心理学研究編集委員会事務局の作業を効率よく進めるために、投稿の際には、どうぞ下記の点にご留意ください。下記の点が満たされていない場合、青年心理学研究編集委員会事務局では、投稿論文を受稿せずにそのまま著者に返送しております。

どうぞよろしくお願い致します。

1. 原著論文・資料論文の長さには制限があります

青年心理学研究の投稿規定には、下記のように書かれています(下線は青年心理学研究編集委員会事務局による)。このように原稿を作成してください。

- | |
|---|
| <p>1. 原著論文の長さは、<u>原則として800字×40枚以内とする(図表、文献等を含む)</u>。ただし、然るべき理由がある場合には、これを越えることができる。その場合には、投稿にあたり理由書を提出する。</p> <p>2. 資料論文の長さは、<u>原則として800字×20枚以内とする(図表、文献等を含む)</u>。</p> <p>11. 図表や写真は、本文に比べ大きな誌面を要する。<u>本誌1頁大のものは、800字原稿用紙3枚に相当する。</u></p> |
|---|

* 然るべき理由というのは、展望論文などの場合に引用文献等が多くなることなどを想定しています。実証的な研究の場合には、理由書を提出されても然るべき理由として認められた前例はありません。

* 図表の枚数換算は、青年心理学研究編集委員会事務局が行います。

Ⅱ. 図と表は1枚の用紙にひとつです

日本心理学会の執筆・投稿の手引き（2005年改訂版）には、下記のように書かれています（下線は青年心理学研究編集委員会事務局による）。このように原稿を作成してください。

p.7

7. 論文の作成

(17) 表と図の挿入希望箇所は、本文の右横の余白に指定しておく。本文中で表と図に言及するときには、**Table 1, Figure 2** のように記す。表・図のスペースも原稿枚数に換算して、全体の制限ページを超えないようにする。

p.27

1.7.1 表の原稿

(1) 表の用紙

表に用いる用紙はA4判の白紙を用い、1枚の用紙に一つの表を書く。

p.29

1.8.1 図の原稿

(1) 用紙

表と同じく、A4判の白紙を使用し、1枚の紙に一つの図を描く。

Ⅲ. 最新版の添付票とチェックリストも提出します。

青年心理学研究の投稿規定には、下記のように書かれています。原著論文・資料論文の投稿の際には、忘れずに提出してください。修正投稿の場合には、添付票だけでけっこうですので、忘れずに提出してください。

20. 論文の投稿に際しては、所定の添付票、チェックリストも提出する。書式は学会HPを参照すること。

また、学会ホームページに、投稿原稿作成用のテンプレートを用意します。チェックリストも、若干の改訂を行います。6月以降にはホームページにアップしますので、どうぞご利用ください。会員の皆さんからの積極的で意欲的な論文投稿を期待しています。

事務局からのお知らせ

事務局長 溝上 慎一

I. 2013年度第21回大会について

今年度の第21回大会は下記のとおりで開催されます。詳しくは同封の一号通信をご覧ください。みなさまからの参加と発表申込みをお待ち申し上げます。

開催場所：福島県福島市 コラッセ福島（産業振興複合施設）

大会委員長：五十嵐敦先生（福島大学）

日時：2013年11月16日（土）～17日（日）

問い合わせメールアドレス：career@educ.fukushima-u.ac.jp

Ⅱ. 事務局の移転のお知らせ（前事務局長より）

本年3月末をもちまして、当学会の事務局は滋賀大学から京都大学の溝上先生のところに移りました。私が事務局を務めたのは1期3年という短い間でしたが、さまざまなことを経験させていただき、またさまざまな方からご支援をいただきましたこと、御礼を申し上げます。

す。

今年からの3年間は溝上先生に事務局長としてご尽力いただきますが、とても多忙な方にお引き受けいただきましたので、皆様からの引き続きのご協力とご支援を宜しくお願いいたします。
(前事務局長・若松養亮)

【追記】事務局移転に伴い、住所・電話番号・メールアドレス・口座番号が変わっております。このニューズレターの末尾に記載しましたので、今後はこちらをご利用ください。

III. 会費の納入状況のお知らせについて

タックシールに下記の記号を付記して会費の納入状況をお知らせしています。2012年度分より年会費の額が変更されていますので、とくに3年以上の未納分がある方は、正確に計算を頂き(途中で「学生会員」から「正会員」に変更された方などは、その区分にも注意して)、納入していただきますようお願いいたします。

納入状況 A : 完納しています。

納入状況 B : 2012年度までは完納しています。2013年度の納入をお願いします。

納入状況 C : 2011年度までは完納しています。2012～13年度の2年分の納入をお願いします。

納入状況 D : 2010年度までは完納しています。2011～13年度の3年分の納入をお願いします。

納入状況 E : 2009年度までは完納しています。2010～13年度の4年分の納入をお願いします。

納入状況 F : 2008年度までは完納しています。2009～13年度の5年分の納入をお願いします。

*年会費 2012年度以降：正会員 7,500円 学生会員 4,000円

2011年度以前：正会員 5,000円 学生会員 3,000円

**振替口座：日本青年心理学会 00940-6-273417

→事務局の京都移転に伴い、変更になっています。旧払込票は使わないでください。

★ ゆうちょ銀行以外の銀行からの振り込み先

店名：〇九九店 当座預金 口座番号：0273417

※この当座預金口座には、銀行のATMからも入金ができます。

※ゆうちょ銀行に口座を持っていて、「ゆうちょダイレクト」の登録◆をしていればインターネット経由で入金できます(「ゆうちょダイレクト」からの振替は月5回まで手数料無料なので手軽&お得です)。

◆http://www.jp-bank.japanpost.jp/direct/pc/what/dr_pc_wh_index.html

※会費を納めていませんと、学会機関誌『青年心理学研究』は送付されません。また、『青年心理学研究』への論文投稿と掲載、大会での発表も、当該年度までの年会費を納めていることが条件となります。

IV. 白紙の会費納入伝票が届いています

2013年5月1日付で京都市の郵便局から2013年度の年会費(正会員)7,500円を納入した伝票が事務局に届きましたが、住所・氏名欄が白紙になっています。これでは納入処理ができませんので、思い当たる方は至急事務局へご連絡ください。その際、納入した郵便局の具体的な局名をお知らせください。当該の伝票に記載されている納入局と照合して確認いたします。

V. 会員異動

(個人情報保護のため、Web 版には掲載していません)

VI. 送付先不明の方のお名前

(個人情報保護のため、Web 版には掲載していません)

日本青年心理学会事務局
The Japan Society of Youth and Adolescent Psychology
〒606-8501 京都市左京区吉田二本松町
京都大学高等教育研究開発推進センター 溝上研究室内
TEL : 075-753-3047
E-mail : seinenshinri@gmail.com
Homepage : <http://wwwsoc.nii.ac.jp/jsyap/>
振替口座 : 00940-6-273417
口座名称 : 日本青年心理学会

お問合せはできるだけ E-mail でお願い致します。